

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | 都市の経済的概念と本質   |
| Author(s)   | 大谷, 政敬  |
| Citation    | 経済論叢 (1930), 31(1): 147-154   |
| Issue Date  | 1930-07-01  |
| URL         | <a href="http://dx.doi.org/10.14989/129902">http://dx.doi.org/10.14989/129902</a> |
| Right       |   |
| Type        | Departmental Bulletin Paper   |
| Textversion | publisher   |

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號 一 第

卷一十三第

行發日一月七年五和昭

## 論 叢

簿記の出發に於ける一問題 . . . 法學博士 上野 道輔

戸數割に於ける調整 . . . 法學博士 神戶 正雄

數學的經濟學の論理的構造 . . . 文學博士 米田庄太郎

購買力平價說の一考察 . . . 文學博士 高田 保馬

## 時 論

米國移民法の改正に就いて . . . 法學博士 末廣 重雄

## 說 苑

東京市中心地晝間人口調査に就いて . . . 法學士 金谷 重義

銀行の信用膨脹に就いて . . . 經濟學士 中谷 實

## 雜 錄

小賣規模の大小と小賣費用との關係 . . . 經濟學士 谷口 吉彦

都市の經濟的概念と本質 . . . 經濟學士 大谷 政敬

## 法 令

賠償金特別會計法中改正・市町村義務教育費國庫負擔法中改正・輸出補償法

## 附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

## 都市の經濟的概念と本質

大谷 政 敬

### 一 序 言

吾人は事物を問題とする場合恒に經驗的なもの(A posteriori)から初め、而して超經驗的なもの(A priori)に及ぶのが自然の順序である、即ち見ゆるものゝ概念から、見えざるものなる本質を採ぬる事に及ぶ、従て都市を經濟的に問題とするに當り先づ其の概念から本質へと考察をなすことゝする。

## 二 都市の經濟的概念

人は都市と言ふ言葉を耳にする時、家屋の櫛比、人馬絡繹たる街路を有する居住所の表象を明瞭に描くであろう、或は大夏高樓なり、居城亦は不夜城の姿を思ひ浮べるであらう。しかしながら一度反省して都市が意味するところのものを嚴密に言語を以てせんとせば、即ち都市の概念を明晰に確立せんと試みると、それは單純な業でないことに氣付く、ゾンバルトの言たる「都市なる概念は、日常用語に於ても、將又學問上に於ても確定して居ない」<sup>1)</sup>といふことは、是の間の消息を傳ふるものである、蓋し、好く吾人に知られて居る事物は元來概念し難きものであるからである。

私は次にゾンバルト、及びマクス、エーベルの定めたる都市の經濟的概念を紹介し批判することゝする。

ゾンバルトは、最近資本主義に於て都市の概念に就て定説なき例として、中世の都市に就きて述べる。即ち

マウレルスの城廓説、シエレケンシユタインの城廓説反對、カルゼンの參事會の紋章説、市場權説、ユステイの門の存在説、人口二千以上を有する居住所とする萬國統計院の採用する説、最後に或る米國人の主張する説即ち都市とは大學を有する場所であるとする説、を列舉して而して是等の諸説中何れが正しきやと自問し、吾人は是非とも一定の見地を決めねばならぬ、吾人の採る見地は、各都市の經濟的な特徴を總括し且つ綜合するにありとし、是の見地より都市の經濟的概念を限定して次の如く述ぶ。

經濟的意味に於ける都市とは、比較的大なる居住所であり、そは自己の生活支持に對しては外部の農業的勞働の生産物に依存する。

是の概念を要約すると、都市とは非農業的な大なる居住所である、といふこととなる。この思想はオートー、シユワルツシルト氏が指示する如く、<sup>3)</sup>都市の維持を構成するところのものは、一に地方の剩餘である。<sup>4)</sup>としたるスミスの古き命題を前提せるもので、農

1) W. Sombart, Der Moderne Kapitalismus, I Bd. S. 124.

2) W. Sombart, Der moderne Kapitalismus, I Bd. S. 124—128.

3) Otto Schwarzschild, Die Grossstadt als Standort der Gewerbe, S. 6.

4) Adam Smith, Wealth of Nation, edited by Cannan. Book III. S. 356.

業的居住所なる地方概念の矛盾概念たる非農業的居住所を以て、都市概念とせる故その學的價值は大なるものではない、再言せば、區分原理となれる地方概念の屬性を否定せる消極概念を以て都市概念として居る故甚だ不確定の概念たるを免れ得ない。

次に都市は比較的大なる居住所となし居るも、今日純粹に都市的なものは、所謂振子移動によりて、居住所より經濟活動の場所に遷りつゝある逆の事實が現はれて居る。

マクス、ヴェーベルに依ると都市<sup>1)</sup>は種々に定義する事が出来るが、凡ての定義に共通なることは常に一の(尠くとも相對的ではあるが)稠密な居住所即ち、一の地域的團體であつて一の又は多くの散在せる居住所では決してないとし、都市の經濟的概念を或る者は、住民の大部分の者が其の生活資料獲得の爲めに農業を産業とせざる居住地、又は産業經營の多岐性、市場の存続等に求むるが、それは反對の現象存し、決定的なものでないといふことを論じて後、都市の經濟的概念を掲

ぐ、

居住民が自己の日常需要の經濟的主要部分を定着的市場に於て充し、而も其の大部分を該居住民並に隣地の住民が其の市場に於て販賣する爲めに生産したか、或は他より獲得したる生産物に依て充す様な場所に於て初めて吾人は經濟的意味に於ける都市と言ふことを得る………而して都市とは(茲に使用する言葉の意味に於ては)市場所在地である。

約言せば、經濟的に都市とは、日常需要品の定着的市場の所在地であるといふこととなる。

然しか、る定着的市場を有せざる地域的集團を都市と稱して居る事實は、吾人の屢々經驗する處であり、且つ純粹に都市的なものにはかゝる市場の存在を必要とせざる傾向にある。

上述せる如くマクス、ヴェーベル、ゾンバルトも、特殊なる各都市の差別を無視し共通なるもの、即ち非農業的居住所、或は日常需要品の定着的市場の存在地なる類を以て都市の經濟的概念となして居る故都

1) Max Weber, Wirtschaft and Gesellschaft. 3. Lieferung. S. 513—514.

市の外延上の確定あるのみにて、内包上よりは確定されて居ない、都市それ自體は問題とされずただ都市に屬するや否やを決定するを以て満足するものである。然し吾人の思惟は、この概念で満足することなく必然都市を都市たらしめるものは何かを、即ち都市の本質を要求してやまない。

### 三 都市の經濟的本質

都市なるものを都市たらしむるものは何か、都市の本質 (Wesen) 或は形相 (Form) は何か、そは、吾人の感覺し得るものに代ゆるに感覺し得ざるものを求むる見地は、是の問に答ふる立場である。凡そ事象の本質を把握するには、事象の現象形態を明かにし、而して其の形態の存在理由を探ぬるにある。従て先づ都市の現象形態を述ぶることから初める。

都市の現象形態は種々に考えらるゝであろうが、經濟と緊密な關係にある形態の重要なものゝ一は人口數である。是の人口數は、二方面から吟味するを得る、一は包包的方面で他は外延的方面である。内包的

方面の人口とは、所謂行政的地域に於ける靜的人口にして、都市の實際上の觀念は是の人口數に基くものであり、是の見方は一八八四年佛國政府に於て初めて採用され、一八八七年萬國統計院が是認して後今日に及んで居る處であつて、人口二千以上の居住所を都市として取扱ふ、獨逸共和國統計では人口二千以下を地方的居住地、二千人乃至五千人を地方的都市、五千人乃至二萬人を小都市、二萬人乃至十萬人を中都市、十萬人以上を大都市として居る。<sup>1)</sup> 米國に於ては始め八千人以上を都市とし、其後四千人以上とし、現今では二千五百人以上を統計上都市として居る。<sup>2)</sup>

我が内閣統計局では市町村を人口別に區分して、<sup>3)</sup>

|        |     |
|--------|-----|
| 一萬以下   | 町村  |
| 一萬乃至二萬 | 町村  |
| 二萬乃至五萬 | 市町村 |
| 五萬乃至十萬 | 市區町 |
| 十萬以上   | 市區  |

の五段階に區分して居る、現今市と稱せられて居るもので最小のものは首里市で人口僅かに二〇、五八二人

1) Adua Ferrin Weber, The Growth of the cities in the XIX. century. 1899. p. 14—15.

2) A. F. Weber, 'ihid, p. 20—29.

3) 内閣統計局編纂第四六回日本帝國統計年鑑三三頁  
明治廿二年四月一日市町村制實施に際しては二萬五千人以上を市とし、現在では三萬以上の人口を有する事を市制實施の條件とす。

(明治廿二年現在二萬五千人とすると四千四百十八人減少)で  
 他方人口二萬以上の町村は實に百十五(伏見町最近市制  
 を實施することとなりし故に統計數字より一を減ず)を數え  
 其の内には人口九萬以上の人口を有するものすら存す  
 る、詳しく列舉すれば、

| (人口) | (町數) | (村數) | (人口) | (町數) | (村數) |
|------|------|------|------|------|------|
| 九萬以上 | 二    | 〇    | 五萬以上 | 一一   | 〇    |
| 八萬以上 | 一    | 〇    | 四萬以上 | 六    | 二    |
| 七萬以上 | 〇    | 一    | 三萬以上 | 一三   | 二    |
| 六萬以上 | 二    | 〇    | 二萬以上 | 六六   | 九    |
| (合計) |      |      | 一〇一  | 一四   |      |

右の數字に徴すれば、町村と稱せられて居るもので  
 も所謂中都市、小都市として何等遜色なきものがある。  
 尤も村と稱せられて居るものには數個の聚落より  
 成立して居住所の散在せるものがある。亦人口四萬以  
 上の町村は概ね所謂六大都市の近接地域に衛星都市  
 (Satellite city)として生成發展し居るもので、經濟的に  
 は是等の衛星都市は、其等都市の中心都市と一體に考  
 ふべき性質のものであり、行政的には、中心都市の區

域へ將來編入される運命を有するものである。

上述の如く内包的人口數による都市の定め方は、時  
 代により國により異なり、一に統計上の便宜によるも  
 茲に吾人が考ふべきことは何故に以上の如く人口二千  
 以上若くは二萬以上を都市として取扱ふやである、思  
 ふに是れが根據は、*Die Qualität schlägt an einer bestimmten Stelle in die Quantität um*)なる命題にある。

即ち右の人口數以下なる時は地方的狀態を脱する事が  
 出来ないとするのである。従て問題は何を標準として  
 地方的狀態、都市的状態といふやを決定せなければな  
 らぬ、これ質の問題の決定に吾人は直面するのである。

都市人口の外延的方面とは所謂動的人口と言はるべ  
 きもので、内包的人口を眠れる都市の人口とすると、  
 外延的人口は活動せる都市の人口で、都市の内部と其  
 の外廓並に隣接地域との間を毎日或は毎週往復する勞  
 働者群の移動、モルゲンロート氏の所謂振子移動<sup>1)</sup>を指  
 すもので、是の移動は程度の差こそあれ、凡そ都市と  
 言はるゝ處には顯現する現象である。例へば、東京市

内外の晝夜人口の増減は（諸交通機關による移動者及び歩行者の推計を基礎として算出）<sup>2)</sup>

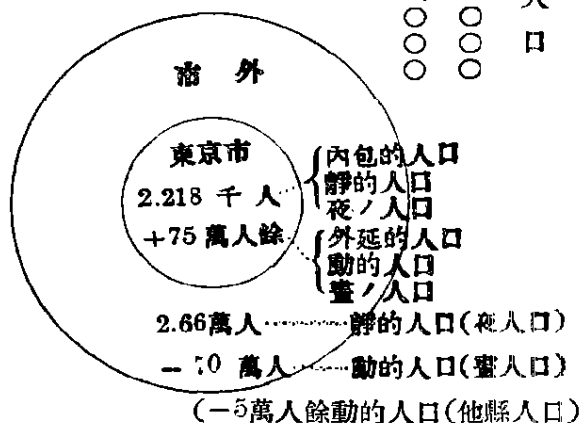
晝の人口

市内 二、九七〇、〇〇〇  
市外 一、九六〇、〇〇〇

夜の人口

市内 二、二一八、〇〇〇  
市外 二、六六〇、〇〇〇

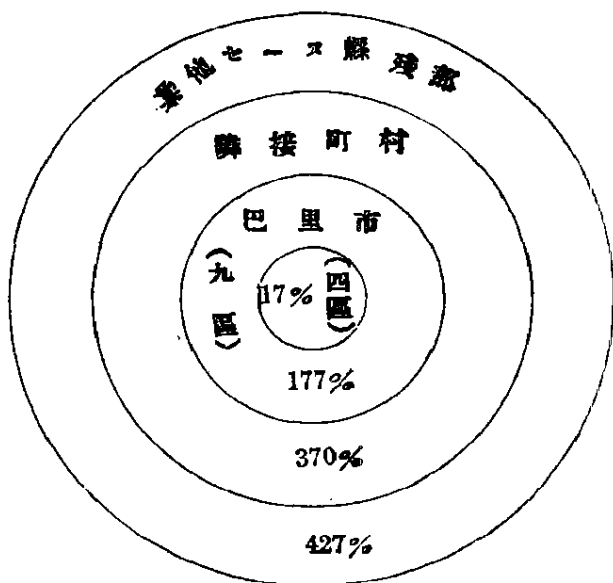
是の數字を圖解すれば、



ボール、ムーリ博士の「都市概念の變遷」なる論文によると巴里、倫敦の中央部人口の減退と、其の周邊人

口の増加を指示して居る。この現象は都市が居住所なる意義を次第に失ひ經濟的活動の場所たる性質を愈々顯著に現はし來ること及び都市の外延的人口の増加を指示するものである。次に圖解すると、

一八六一年より一九一一年に至る巴里都市中央部と其の周邊人口の増加割合、

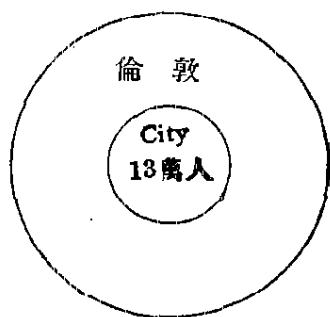


2) 社會學雜誌六七號一三頁——四頁、磯村英一氏、集團としての都市の特質、  
3) La Vie Urbaine (No. 1-2, Mars-Juin. 1919. 奥村稔氏譯文、都市地理研究一二九頁——一三六頁

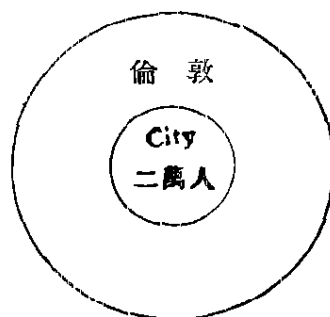


(一八五一年より一九二一年に於ける倫敦中央部たるシチーの人口減退、)

(一八五一年)



(一九二一年)



以上論ずる如き人口形態の、經濟的存在理由は果して如何、吾人は是の問題を解明するに先ち、經濟的なる意味を確定し置くことが便宜である、否な必要であると思ふ。一般に經濟的と言はるゝ場合には二重の意味を有する、其の一は、生活資料の獲得行爲を意味する場合で、其の二は、利潤的なる行爲を意味する場合である。従て第一の意味に於て都市の内包的、外延的人口形態を經濟的に可能ならしめる要請は原始經濟財ならざる財、即ち加工經濟財或は文化財

の生産に従事するにある、其れ故に都市の經濟的本質は加工經濟財或は文化財の生産に在りといふ事になる。もつとも原始經濟財の生産に従事する一群が都市の外廓に接する地域に存し、亦存する可能性があるが、それは都市全體より見れば僅少なものである。例へば獨逸諸都市に於て、農業に従事して居る數は、全く擴大された都市區域に於てさえ言ふに値する程でない。其の人口數の平均項は一%乃至二%で、ただ少數の場所に於てのみ是の平均項を少し昇る。<sup>1)</sup>我が大阪市に於て大正九年十月一日現在の調査によれば全人口の一、〇二%が原始産業に従事して居り、これを大正十四年度の都市區域擴張の地域を標準とするも其數は三、四%である。<sup>2)</sup>

第二の意味に於て、都市の内包的、外延的人口形態を經濟的に可能ならしめる要請は、工業資本、商業資本、交通業資本、金融資本によりて利潤を獲得するにある、其れ故に都市の經濟的本質は、工業資本、商業資本、交通業資本、金融資本による利潤の獲得である

1) Allgemeines Statistisches Archiv. Bd. 18 Heft. 4. S. 534.

2) 第二十五回大阪市統計書人口編 2—25頁、職業調査は大正九年度國勢調査に基く

と言ひ得る。試みに我國の所謂六大都市の會社數及び資本金額を示すと。

六大都市ノ會社及資本金

|       | 會社數   | 公稱資本金     | 拂込資本金     |
|-------|-------|-----------|-----------|
| 大正十四年 |       | 千円        | 千円        |
| 大阪    | 3,906 | 2,791.835 | 1,946.795 |
| 東京    | 3,510 | 6,605.655 | 3,997.924 |
| 名古屋   | 1,324 | 424.472   | 282.235   |
| 京都    | 672   | 187.397   | 86.419    |
| 神戸    | 1,461 | 908.105   | 656.506   |
| 横濱    | 971   | 339.023   | 265.582   |
| 大正九年  |       |           |           |
| 大阪    | 2,087 | 2,102.995 | 1,257.480 |
| 東京    | 2,697 | 4,395.844 | 2,757.624 |
| 名古屋   | 1,187 | 330.777   | 207.337   |
| 京都    | 621   | 163.189   | 89.417    |
| 神戸    | 813   | 755.061   | 516.179   |
| 横濱    | 840   | 373.619   | 281.411   |

# 結 言

以上論ずる如く、吾人は思惟段階の最初のものである歸納的方法による都市の抽象的概念を述べ次に各都市の人口形態を媒介として都市の經濟的本質の二重の意味を明かにした、然しながら是の考察方法の特質と

して、本質的なものが、しからば如何にして各都市に顯現するやは全く不明である、即ち一面性、抽象性たるを免れ得ない。従て思惟は、本質的なもの、換言せば普遍的なるものが、都市、非都市なる、特殊を貫く論理を要求する。この論理によりてこそ、具體的な都市の概念を把握し得るのであるが、そは他日の機會に譲りて悟性論理による都市の考察のみで本稿を終ることとする。